

英語同類要素の語順に関する考察*

百 武 玉 恵・秋 山 沙 緒 里¹

1. はじめに

一般的に、英語と日本語では基本語順が異なり、英語では文の解釈に不可欠な各構成要素の意味関係は主に語順によって示される。一方、日本語はそれぞれの要素を並べ替えても文は成立する。つまり、日本語の場合は英語ほど語順を重要としない。

修飾語句の語順においても英語と日本語ではその重要度が違う。例えば、「彼女は昨日飛行機に遅れないように家を早く出た」と言う場合、日本語では「飛行機に遅れないように彼女は昨日早く家を出た」「昨日彼女は飛行機に遅れないように家を早く出た」と言うこともできる。このように日本語は、語および句を比較的自由に並べ換えることができる。先の文を英語で表すとShe left home early yesterday not to be late for the flight. となる。続いて、これを日本語の場合と同じように語順を入れ換えると*She left home not to be late for the flight early yesterday. *She yesterday left home not to be late for the flight early. などとなり、英語としては非文になる。日本語の場合は上記の例以外にも多くの様々な言い方ができるが、英語では限られた言い方でしか言い表すことができない。英語における修飾語句の語順変換には制限があり、日本語のものよりかなり厳しい規則に従わねばならない。

「様態」、「場所」、「時」など種類の異なる修飾語句が二つ三つ併用されることは一般的であり、その語順については、英語の場合は学校文法の固定化した考え方が主流である。しかしながら、その規則が唯一無二とは言えないようだ。

- (1) She came to the laboratory quite regularly twice a day during April.

場所 様態 (頻度) 時間

4月中は1日に2度きちんと実験室に来了。 (天満 1968:58)

- (2) He studied economics hard at the library six hours every day.

様態 場所 時間 (頻度)

彼は毎日6時間図書館で一生懸命経済学を勉強した。 (安井 1996:490)

例文(1)と(2)の共通点は、「場所」が「時」に先行するという点である。しかし、天満(1968)では、「場所」は「様態」の前に置かれると述べられている。他方、安井(1996)は「様態」が「場所」に先行すると述べている。このように、修飾語句が併用される場合の語順についての相反する原則が、いわゆる文法書と呼ばれる文献に見出される。一見、語順には絶対的な規則があると思われがちだが、幾つかの考え方があるようだ。

本稿では、同類要素の語順の規則性について考察する。まず第2章は、前置詞句の語順に関する先行研究を紹介する。第3章では浅田壽男氏の語順を決定する「粗密の原理」についての主張を紹介し、第4章では、[副詞+前置詞句]の場合で「粗密の原理」が適用されることを証明する。

第5章においては、一見、浅田の主張への反例に見える事象を考察していく。

2. 前置詞句の語順に関する先行研究

本稿における「同類要素」というのは、一つの文の中にある同格の語句を指すのではなく、「同じ種類の語句」という意味である。「場所」を表す二つ以上の修飾語句すなわち同類要素を併用する場合、天満 (1968) は「小さな単位が、大きな単位に先行する」と述べている。

- (3) She lives in a small village in New England.

ニューイングランドの小さな村に住んでいる。 (天満 1968:56)

(3)の例では、小さな単位である「小さな村」が先に置かれ、次いで大きな単位である「ニューイングランド」を後に置いている。「時」の語順の場合もこれと同様である。

- (4) Mr. Brown is broadcasting at two o'clock tomorrow afternoon.

時点 時間

ブラウン氏は明日午後2時に放送する。 (天満 1968:55)

(4)の例文においても、「2時に」は時の流れの中にある1点を示し、「明日午後」で時間の幅を大まかに示している。

しかしながら、Bennett (1975) の同格の目的語が並列する文は次のような順番に並べられている。さらに、Gruber (1976) は「連続する目的地を表す前置詞句の語順は一般的なものから具体的なものへと並べるのが好ましい」と述べている。

- (5) Trevor has gone to Wembley to the Cup Final.

- (6) All this traffic must be coming from Wembley from the Cup Final.

((5)-(6) Bennett 1975:31)

- (7) a. John sent the book to New York to Bill.

b. *John sent the book to Bill to New York.

- (8) a. The duck swam from the shore from the tree.

b. *The duck swam from the tree from the shore.

- (9) a. The bird flew into the house out of the tree from its nest.

b. *The bird flew into the house from its nest out of the tree.

((7)-(9) Gruber 1976:85)

(7-a)の語順を(3)に示した語順にするためには、(7-b)のto New Yorkではなくin New Yorkにしなければならない。浅田 (1981) は、Bennett (1975) とGruber (1976) を踏まえた上で「粗密の原理」を提唱し、以下のようにまとめている。

理論的にも、「密」から「粗」への情報の流れは散漫になってしまう。まず、「大まかな情報」を示してから、「より詳しく、こまやかな情報」を付け加えるということが自然な順序であり、理にかなっている。

- (i)『談話の中の同一指示語句は、「粗」から「密」へと流れる。』 (浅田 1981:82)

次に、同形の前置詞句を併用する場合に「粗密の原理」が働いていると考えられる例を示す。

[at NP₁ at NP₂]

まず主語が目をやった場所を大まかに伝えてから、よりこまやかな位置をその後に置いている。

(10) Zoran arrived, stopped his horse, and stared down at the ground, at Kava.

ゾランも到着して馬を止めると、地べたのカバをじっと見下ろした。

(G. A. Effinger, *Planet of the Apes #1: Man the Fugitive*—浅田 (1986 b) より再掲)

(11) Sprawled on the cot in his darkening cell at the Honolulu jail, Illya looked through the bars at the lighted corridor, at the guards and trustys moving around out there in the onion yellow light.

ホノルルの暗い留置場の寝床に腹ばいになり、イリヤは鉄格子越しに、明かりのついた廊下の、黄色い明かりの下を看守や模範囚が行き来するのを見ていた。

※本文のtrustysは原文のまま。正しくはtrustiesである。

(Whittington, H. *The Man from U. N. C. L. E. #2: The Doomsday Affair*—浅田 (1997) より再掲)

[in NP₁ in NP₂]

大まかな情報である建物が先に置かれ、よりこまやかな情報の部屋の番号が後に置かれている。

(12) a. I live in this building in Apartment #207.

b. *I live in Apartment #207 in this building. (浅田 1997 : 17)

(13) ... a Sindler Coll, who lives in the Everglade Apartments in two hundred and nine, ...

エヴァグレード・アパートの209号に住むシンドラー・コールという人。

(E. S. Gardner, *The Case of the Silent Partner*—石橋 (1966) より再掲)

[to NP₁ to NP₂]

最初に大まかな場所を示した後、より詳細な位置を指定する。

(14) Trevor has gone to Wembley to the Cup Final.

トレヴァーはウェンブリーの決勝戦に行ってしまった。 (5)

(15) a. John sent the book to New York to Bill.

b. *John sent the book to Bill to New York. (7)

[from NP₁ from NP₂]

大まかな場所を先に伝えてから、その後より密な情報として位置を特定している。例文(17)の逆の言い方(from my grandmother, from Canada)はインフォーマントチェックにより、容認可能という回答を得た。ここで、(15)の例文と(17)を比べてみたい。to New York とto Billを逆にすると不適格な文になるが、(17)はfrom Canada とfrom my grandmotherを逆に言い換えても非文にならないのである。この問題については、さらに深い考察が必要である。

(16) a. The duck swam from the shore from the tree.

b. *The duck swam from the tree from the shore. (8)

(17) Every year, I get a birthday present from Canada, from my grandmother.

(Leech他 2003 : 210)

毎年、私はカナダの祖母から誕生日プレゼントをもらっている。

3. 「粗密の原理」

3.1. 二重目的語

浅田は「粗密の原理」が前置詞句の語順ばかりでなく、その他の同類要素の語順にも適用されることを示している。例文(18)において、動詞envyがとる目的語himとhis luckを文法的に対等な直接目的語と浅田(1981)は考えるが²、文法的には等しいはずの二つの目的語の語順を入れ換えると非文になるという、一見、不可解な現象を紹介している。

(18) a. They envied him his luck. (浅田 1986 a : 48)

NP₁ NP₂

b. *They envied his luck him.

NP₂ NP₁

(*ibid.*)

さらに、上の現象を説明する手がかりとしてJoseph(1976)の仮説を用いた久野(1978)を参照している。

(19) I envy John his new car.

NP₁ NP₂

僕は、ジョンの新車のことで、ジョンがうらやましい。

(久野 1978:185)

(20) I envy John Mary's car.

NP₁ NP₂

僕は、メアリーの自動車のことでジョンがうらやましい。

(久野 1978:186)

例文(19)は適格であるが、(20)は単独文としては不適格である。それは、NP₁のJohnは話し手のうらやむ相手ということで、両者は関係づけられているが、話し手とNP₂のMary's carの間には何らかの結びつきを示す文脈がないためである。久野は次のように述べている。

この文を適格文とするためには、メアリーの自動車の理由で話し手がジョンをうらやましく思う理由を説明するコンテキストが必要である。例えば、ジョンが、メアリーの自動車を自由に運転できるという前提があれば、(20)が適格文となる。 (*ibid.*)

このことから、ともかくNP₂にNP₁に関する事柄が含まれてさえいれば適格文ができることが多いと考えられる。

次に、Joseph(1976)の観察を紹介している。

(21) a. I envy John the fact that Betty could come up to him like that.

NP₁

NP₂

ベティーがあんな風にジョンの処にやって来れるとは、僕はジョンがうらやましい。

b. ?*I envy John the fact that he could come up to Betty like that.

NP₁

NP₂

ジョンがあんな風にベティーの処にやって来れるとは、僕はジョンがうらやましい。

(久野 1978:187)

上の例文から明らかなように、(21 - a)はNP₂に含まれるNP₁のJohn(him)が、come up toの視点の焦点の位置に現れているので適格文となり、(21 - b)はcome up toの視点の焦点の位置にNP₁

(John)とは異なるBettyが現れているので、不適格文となる。このように話し手の視点の焦点の位置がNP₁にもNP₂にもあり、それらが同一指示でなければならないことがわかる。(21 - a)のNP₁とNP₂をみると、視点が同じJohnで書かれている。そして、話し手はまずうらやましい対象Johnを伝えてから、その後うらやましい理由を伝えている。したがって、NP₁とNP₂は同一指示であり、前者が大まかな情報、後者がこまやかな情報を表している。

浅田が挙げた「粗密の原理」が働いている様々な具体例と上に挙げた例以外に「粗密の原理」が働くと考えられるパターンをあわせて以下に紹介していきたい。

3.2. [動詞+人+前置詞+the+名詞]の型

まず主語の動作の対象(人)という全体を示し、次に密な情報としてその人の全体の中にある具体的な一部を限定している。(22 - b)はこまやかな情報を伝えてから、大まかな情報を伝えるので冗漫になり、非文となるのである。

(22) a. I hit him on the head. (浅田1981: 82)

NP₁ NP₂

b. *I hit on the head him.

NP₂ NP₁

(*ibid.*)

(23) She nearly fell forward and I caught her by the arm.

NP₁ NP₂

彼女は危うく前のめりに倒れるところだったが私は彼女の腕をつかまえた。

(24) I caught him on the nose with another blow.

NP₁ NP₂

私は彼の鼻にパンチをもう一度浴びせた。

(25) He grabbed me by the collar.

NP₁ NP₂

(けんかで)彼は私の胸ぐらをつかんだ。

(26) She patted him on the cheek affectionately.

NP₁ NP₂

彼女は彼のほおをやさしくなでた。

(27) She struck me on the chin.

NP₁ NP₂

彼女は私のあごをなぐった。

(23) - (27) [ジーニアス⁶]

3.3. 場所副詞と前置詞句による二重の場所指定

○漠然とhereとthereで大まかに場所を指した後、より詳しい情報として前置詞句がその位置を特定している。

例文(28)では、hereが大まかな情報を表し、on the beachがこまやかな情報を表している。この順序を逆(on the beach, here)にしてインフォーマントチェックを行って見たところ、逆にした言い方は不自然になるという意見であった。同様に、例文(29)(30)に関してはインフォーマントチェックにより、逆の言い方はできない。また、(31)の下線部を逆にした言い方on the table

thereは容認可能であった。

- (28) The young samurai beside Omi said, 'May I please ask that he be allowed to commit seppuku here, on the beach?'

「せめて、この浜の上で彼に切腹させてやってはもらえないでしょうか」と、近江の側にいた若い侍が言った。(J. Clavell, *Shōgun*—浅田 (1986 b) より再掲)

- (29) a. I stood there at the bottom of the steps, afraid to ask how long she had been sitting, knowing only that I had wronged her terribly.

どのくらいそこに座っていたのかと聞くのも恐ろしく、僕はその階段の一番下に立っていた。ただ彼女にすまないことをしたという気持ちでいっぱいだった。

(E. Segal, *Love Story*—浅田 (1986 b) より再掲)

- b. * I stood at the bottom of the steps there, afraid to ask how long she had been sitting, knowing only that I had wronged her terribly.

- (30) a. I am living here in Kobe.

私はここ神戸に住んでいます。

※「神戸のここに」(in this part of Kobe)ではない。

[ジーニアス⁶]

- b. * I am living in Kobe here.

- (31) Put the groceries there on the table.

八百屋で買って来たものをそのテーブルの上に置きなさい。

(垣田 1989:583)

○Abroadが漠然と国外ないし外を表し、この語の後に前置詞句を付け加えて明確に場所を指定する。

- (32) I felt restless and ill at ease not seeing Ellie and knowing she'd gone abroad to France.

僕はエリーに会えないとなると、彼女がフランスに行っているとわかっていながら、気持ちが落ち着かなくなり不安でならなかった。

(A. Christie, *Endless Night*—浅田 (1986 b) より再掲)

- (33) Terrorists are abroad in our cities.

テロリストがわが国の都市のあちこちにいる。

[活用大辞典]

○Somewhereでまず漠然としたどこかの場所を聞き手の頭に浮かべさせた後、前置詞句で厳密に場所を指定する。

- (34) The man did not need response; he had worked all of this out somewhere inside himself and Caine was little more than an object.

彼には返事など無用であった。つまりこのようなことはすべて、どこか自分の中だけで思いを巡らせており、ケインなど単なる一つの物でしかなかったのだ。

(H. Lee, *Kung Fu #1: The Way of the Tiger, the Sign of the Dragon*—浅田 (1986 b) より再掲)

3.4. 同一指示の名詞句

例文(35)では、your brotherはHeの言い換えである。「彼」(He)と言っても、聞き手にとっては

大まかな情報で誰を指しているのかわからないので、こまやかな情報として「君の兄さん」(your brother)と付け加えたわけである。

(35) He's a nice chap, your brother.

NP₁

NP₂

(36) I didn't like it very much, that book of yours.

NP₁

NP₂

(37) I like John very much, your brother I mean.

NP₁

NP₂

((35) - (37) Dik 1978—浅田 (1982) より再掲)

(38) He was a great poet, that son of the Stradford butcher, William Shakespeare.

NP₁

NP₂

NP₃

大詩人だった、あのストラッドフォードの肉屋の息子ウィリアム・シェイクスピアは。

(荒木・安井 1992 : 1597)

4. 「粗密の原理」の実証

これまでは、浅田が自身の論文の中で挙げている「粗密の原理」の例を紹介してきた。次は、新たに筆者が発見した「粗密の原理」が働いている例をみていく。それは、[副詞+前置詞句]の場合である。安井 (1996 : 491) に興味深い記述がある。

次のように、先に大ざっぱに位置を示して、次に具体的に場所を示すような、一定の決まった用法に注意。

(39) He is out in the field.

<彼は野原にでています。>

(40) The house is up on the hill.

<その家は丘の上のほうにある>

(41) He went down to Scotland.

<彼は(ロンドンから)スコットランドへ出かけた。>

安井は[副詞+前置詞句]の例文を挙げて、この配列に「粗密の原理」があることを示唆している。例文(39)では、outで大まかに屋外を示して、具体的な場所をin the fieldで示している。(40)については、先にupによって漠然と上方への方向を示して、厳密な場所をon the hillで指定している。(41)の例文は、都市部(首都)から地方への方向を示すdownにより大まかな情報を表し、次に特定した場所をto Scotlandで示している。以下は、上記のような「粗密の原理」が働いている[副詞+前置詞句]の文をみていく。すべての例文についてインフォーマントチェックを行ったところ、順序を逆にした[前置詞句+副詞]は不適格であるという回答を得ることができた。

[up+PP]

最初に空に向かっていく動きを示す副詞upにより大まかな情報を伝えてから、具体的な場所を表す前置詞句を従えている。

(42) a. Jack climbed up to the top of the ladder.

ジャックははしごの一番上まで昇った。 (垣田 1989:583)

- b. *Jack climbed to the top of the ladder up.
- (43) a. You'll find it up on top of the filing cabinet. (Huddleston & Pullum 2002 : 645)
それは書類整理用キャビネットの上にあります。
- b. * You'll find it on top of the filing cabinet up.
- (44) a. The lark is flying up in the sky. (石橋 1966 : 1282)
ヒバリは空高く舞い上がっている。
- b. *The lark is flying in the sky up.
- (45) a. He looked up at the stars. (政村 2002:468)
彼は星空を見上げた。
- b. *He looked at the stars up.

[down+PP]

最初に下方に向かっていく動きを示す副詞downにより大まかな情報を伝えてから、具体的な場所を表す前置詞句を従えている。

- (46) a. Sit down, please, and put your bags down on the floor.
どうぞおかけになってください。あなたのカバンは床の上に置かれたらどうですか。
(垣田 1989 : 583)
- b. *Sit down, please, and put your bags on the floor down.
- (47) a. The river flows down into the sea. [ジーニアス⁶]
その川は海に注ぎこむ。
- b. *The river flows into the sea down.
- (48) a. They have settled down near London. (ibid.)
彼らはロンドンの近くに定住した。
- b. *They have settled near London down.

[out+PP]

最初に漠然と外を示す副詞outにより大まかな情報を伝えてから、具体的な場所を表す前置詞句を従えている。

- (49) a. His house is out in the country, several miles beyond the city limits.
彼の家はずっと田舎にあって、その都市の境界線の数マイル先だ。 (垣田 1989:583)
- b. * His house is in the country out, several miles beyond the city limits.
- (50) a. The rocks jutted out into the sea. (ibid.)
岩は海の方へと突き出していた。
- b. *The rocks jutted into the sea out.
- (51) a. I saw you last night out on the edge of town. (Huddleston & Pullum 2002 : 645)
昨夜町のはずれであなたを見かけた。
- b. *I saw you last night on the edge of town out.

[over+PP]

最初に距離を渡るという意味の副詞overにより大まかな情報を伝えてから、具体的な方向を表す前置詞句を従えている。

- (52) a. My ball went right over into the neighbours' garden. (*ibid.*)
 ボールが一直線に隣の庭に飛んで行った。
 b. *My ball went right into the neighbours' garden over.
- (53) a. He is going over to America. (石橋 1966 : 1282)
 彼はアメリカへ行く予定である。
 b. *He is going to America over.

[off+PP]

時間的・空間的に離れる動きを示す副詞offにより大まかな情報を伝えてから、具体的な場所を表す前置詞句を従えている。

- (54) a. He got off at the corner. (Thomson & Martinet 1986 : 104)
 通りの角で降りた。
 b. *He got at the corner off.
- (55) a. He turned off into the lane. [ジーニアス⁶]
 彼はわきの小道へはいった。
 b. *He turned into the lane off.

5. 一見、「粗密の原理」への反例に見える事象

- (56) a. John sent the book to New York to Bill. (7)
 b. John sent the book to Bill in New York. (Gruber 1976 : 86)
 c. John sent the book to him in New York. (*ibid.*)
- (57) a. The duck swam from the shore from the tree. (8)
 b. The duck swam from the tree at the shore. (Gruber 1976 : 86)
 c. The duck swam from it at the shore. (*ibid.*)
- (58) a. The bird flew into the house out of the tree from its nest. (9)
 b. The bird flew into the house from its nest in the tree. (Gruber 1976 : 86)
 c. The bird flew into the house from it in the tree. (*ibid.*)

例文(56)において、(a)のto New Yorkが(b) (c)でin New Yorkに代わっている。移動(motional)を表す前置詞toが、非移動(nonmotional)を表す前置詞inになると、後置されるのである。同様に(57) (58)においても移動前置詞句から非移動前置詞句に代わると情報の語順は密から粗になり、「粗密の原理」の反例と思われるかもしれない。しかし、これは前置詞句の何らかの特性が「粗密の原理」に優先すると考えるのが妥当であろう。この問題については、さらに考察を要する。

- (59) a. Many people drink in pubs in London. (荒木・安井 1992 : 966)
 b. *Many people drink in London in pubs.

上記の例文をみると、in Londonが「粗な情報」であり、in pubsは「密な情報」であるから、

「粗密の原理」の反例と思われるかもしれない。しかし、この同形の前置詞句を統語的制約と意味的制約から考察していくと次のようなことがわかるだろう。In pubsは、動詞drinkの飲む場所を示し、動詞を直接修飾するといった点で動詞との結合力が強いのに対し、in Londonは文全体を修飾し、パブで飲む人をどこでみられるのかを表した、より広い地域を表す場所辞である。この例文の意味は「多く的人是ロンドンではパブで飲みます。」となる。また、以下の例文からでも、in pubsは飲む場所を表し、in Londonは動詞drinkを修飾するのではなく、文全体を修飾している。(61)も同様である。(62)は動詞startsが詳しい情報であるat eight o'clockと結びつき、tomorrowがそれよりも後に来て、文全体を修飾している。

(60) c. In London many people drink in pubs. (ibid.)

d. *In pubs many people drink in London. (ibid.)

※ 動詞との結びつきが強いin pubsは外置できない。

(61) a. Many people eat in restaurants in London. (Quirk et al. 1985 : 519)

b. *Many people eat in London in restaurants.

※ 動詞eatとの結びつきが強いin restaurantsの前に文修飾のin Londonを挿入することはできない。

c. In London many people eat in restaurants.

d. *In restaurants many people eat in London.

※ 下位の修飾語in restaurantsは、文頭に生起して上位の修飾語in Londonを支配できない。

(62) a. The meeting starts at eight o'clock tomorrow. (荒木・安井 1992 : 966)

b. *The meeting starts tomorrow at eight o'clock.

※ 動詞startsとの結びつきが強いat eight o'clockの前に文修飾のtomorrowを挿入することはできない。

c. Tomorrow the meeting starts at eight o'clock. (ibid.)

d. *At eight o'clock the meeting starts tomorrow. (ibid.)

※ 下位の修飾語at eight o'clockは、文頭に生起して上位の修飾語tomorrowを支配できない。

つまり、このような例文は、「粗密の原理」に対する直接の反例ではなく、統語的制約と意味的制約が「粗密の原理」より優先することを示しているのである。

6. おわりに

本稿では、同一指示の修飾語句を中心に英語の語順について考察した。第2章では、同類要素の情報の流れに注目した。第3章においては、浅田による「粗密の原理」を説明し、具体例を挙げた。第4章では、「粗密の原理」が[副詞+前置詞句]の場合にも働いていることを実証した。第5章では、「粗密の原理」に対する反例と思われる事象を取り上げ、考察を行った。その結果、浅田が提唱している「粗密の原理」をより強固なものとし、妥当性があることを再確認することができたと考える。しかしながら、本論で提示した例文が示すとおり、検討すべき点も同時に多々残している。これらの問題については、今後の研究課題としたい。

- 垣田直巳(編). 1989. 『英語指導法ハンドブック 5 <英文用例編>』大修館.
- 久野暉. 1978. 『談話の文法』大修館.
- Leech, G., B. Cruickshank and R. Ivanič. 2003. 『コーパス活用 ロングマン実用英文法辞典』 [An A-Z of English Grammar & Usage] 武田修一監訳. ピアソン・エデュケーション.
- 政村秀實. 2002. 『英語語義イメージ辞典』大修館.
- 奥田隆一. 1984. 「『ENVYの語法』をめぐって」近畿大学『教養部研究紀要』第2号, 59-70.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- 高橋邦年. 1984. 「『ENVYの語法』について」『英語教育』第33巻第3号, 67-69.
- 天満美智子. 1968. 『修飾(下)』(英語の語法 表現篇10) 研究社.
- Thomson, A. J. and A. V. Martinet. 1986. *A Practical English Grammar* (4th ed). Oxford University Press.
- 綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘. 2000. 『ロイヤル英文法改訂新版』旺文社.
- 安井稔. 1996. 『英文法総覧一改訂版一』開拓社.

《辞書》

([]内は本稿で用いている略称)

『新編 英和活用大辞典』第1版. 1995. 研究社.

[活用大辞典]

『ジーニアス英和辞典《改訂版》』第6版. 1999. 大修館.

[ジーニアス⁶]

謝辞

この研究において、関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科教授浅田壽男先生に電子メールでのご指導をいただきました。ここに記して深く感謝いたします。また、九州ルーテル学院大学講師ケビン・アクストン先生、パトリック・ベンケ先生にインフォーマントとしてご協力をいただき、心からお礼を申し上げます。